

看護職部門

入選

名誉ある不名誉なあだ名

【天分県】川井 未来 36歳

「来たな、『肛門大好きな看護師』」

満面の笑みを浮かべた患者さんにつけられた、私の人生の中でおそらく一番名誉ある不名誉なあだ名です。

「入院してから通じがなくて苦しいのよ」。便秘は、私が入院患者さんからよく訴えられることで、一、二を争うほど多い問題です。食事が食べられないから、運動量が足りないから、もともと出にくいから、理由はさまざまですが、入院前はきちんと自然に排便できていたのに、入院したから便秘になつたと訴えられることも多いです。大抵は下剤を内服すれば排便がありますが、それでも排便がで

ない患者さんの中にはいます。

「いつも通じが出らんから、看護師さんに摘便してもらってるんだ」。入院生活が長く、処置をしないと排便ができない患者さんは、摘便をされ慣れているのでお腹が張ってくる自分から摘便をするよう依頼をします。そんなことが多いので、もともと摘便が上手くはなかつた私ですが、今では自信を持って実施できる技術になりました。

「すつきりした！ あんた上手いな」。摘便が終わつた後、患者さんが笑顔で言ってくれるその言葉がなによりもうれしい。ある患者さんは、私のことを「摘便の上手な看護師」として覚えてくれたのですが、次

「天分県」になつていました。摘便で排便がすつきりできることが好きなことは否定ができませんが、別に肛門が好きなのではなかったのに、苦笑して否定したことを覚えていてほしい。次はいつ出勤なの」と、毎回会うたびに聞かれ、私が担当する日を楽しみにしてくれている姿がとてもうれしく、誇らしく思えました。

「肛門大好きな看護師」。何も知らない人が聞いたとしても不名誉なあだ名だと思いますが、私にとつてはとても名誉あるあだ名です。これからもこの名誉ある不名誉なあだ名に恥じないよう、摘便の技術を磨いていきたいと思